

<研究ノート>

ラオ語の/si?/に関する考察 A Study of /si?/ in Lao

鈴木 玲子
Reiko Suzuki

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
School of Language and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は、ラオ語の/si?/について使用場면을検討し、/si?/の意味を記述することを目的とする。/si?/は、事態の成立自体は不確実であるが、そのようになり得る、あるいはなつてほしいという話し手の心的態度に依存するマーカーである。それは実現に対する蓋然的認識であると換言できる。/si?/の後続部分は話し手の蓋然的認識、即ち推測内容である。従つて/si?/は推測の意味を有すると言える。推測の意味を有する/si?/はこれから起こりうる叙述内容に使われることが多い。このことから/si?/が時の解釈に関与し得ることがある。

Abstract: This paper aims to clarify the meaning of /si?/ in Lao, by focusing on the occurrence situation of /si?/. /si?/ is the marker depending on the speaker's intension which the speaker implies that the event is uncertain, but it could or should occur. In other words, it is the probabilistic recognition of realization. The elements following /si?/ indicate the speaker's probabilistic recognition, that is, the inference. Therefore, it can be said that the meaning of /si?/ is conjecture. The conjectural /si?/ is often used to describe what may occur beyond. In this regard, /si?/ can be related to the interpretation of time.

DOI: <https://doi.org/10.15026/0002001025>

キーワード: アスペクト, 時制, モダリティ, ラオ語

Keywords: aspect, tense, modality, Lao



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1. はじめに¹

1.1. 目的

本稿は、ラオ語の/siʔ/について使用場面を詳細に検討し、/siʔ/の意味を記述することを目的とする。

1.2. /siʔ/について

/siʔ/は従来、未然 (Wright 1994)、未来時制 (Seesouvan 2000)、非現実 (Enfield 2007) を表すなどと記述されており (後述 1.5.)、 「～つもりだ」 「～予定だ」という日本語に近い。統語的には動詞 (句) の直前に置かれる。単独で用いられることがなく、文中に置いて初めて意味をなす付属語で、助動詞と記述しているものもある (Seesouvan 2000)。

1.3. 方法

具体的な検討方法は以下のとおりである。

- 1) 現代小説や映画の台本から/siʔ/使用文 (以下「/siʔ/文」) を収集する。
- 2) 1) で収集した/siʔ/文について、同じ場面で/siʔ/を削除するとどうなるか、コンサルタント調査を行い、/siʔ/の使用制限について考察する²。
- 3) /siʔ/と共起できない文について考察する。
- 4) 2) と 3) をふまえて/siʔ/の意味をまとめる。その記述は上記 2) 3) の内容を矛盾なく説明できるはずである。
- 5) /siʔ/の意味とラオ語文の時の表現との関連について記述する。

1.4. 資料

資料は下記の映画の台本と現代小説で使用されている/siʔ/文を使用した。1) はラジオ番組のドラマの台本、2) は映画を文字起こししたもので、3) から 5) が現代小説である。なお、資料末の () の数字は/siʔ/文の数を表す。

- 1) Bounyavong, Douangdueane (2013) 'huacay paatthanaa' Dokked Co., Ltd. (329)
- 2) Silisakda, Anousone (2010) 'khor phiang hak' Lao Art Media Co., Ltd. (158)
- 3) Dokked (2006) 'aathan haeng phongphay' Champa kaanphim (305)
- 4) Saengmany, Bounseun (2005) 'papheenii lae siivit' Hoongphim Saisana kaanphim (131)
- 5) Douangchampa (2002) 'faa piin' Dokked Co., Ltd. (145)

1.5. /siʔ/に関する先行研究

/siʔ/に関する先行研究には、次のようなものがある。

Wright (1994) は、「/siʔ/は、未然、未遂行を表すアスペクトマーカ―」とし、Enfield (2007) は、「/siʔ/はアスペクト的なモーダルマーカ―の一つで irrealis を表すマーカ―」としている。「irrealis」は、日本語では「非現実」と言うことが一般的で、「非現実事態」とは、「話者の現実世界に存在していない事態・話者の立っている現実世界で話者が経験的に把握していない事態 (尾上 1999)」のことである。金子 (2010) は、「/siʔ/は不確実性の判断を表す」としている。また、教育省教育科学研究所推奨の Seesouvan (2000) に代表されるようにラオスで出版されている文法書はいずれも「助動詞。未来時制を

¹ 本研究は JSPS 科研費 23K00520 の助成を受けた研究成果の一部である。

² コンサルタントは、1988 年ラオスの首都ビエンチャン、サイタニー郡で生まれ、同地区育ちのラオ族女性である。2019 年から 2020 年の 1 年間と 2022 年 10 月から現在まで日本在住。ご協力に心よりお礼申し上げます。

表す」としている。このように/siʔ/に関する記述について統一された見解はない。

以下に/siʔ/が未然や未来時制を表すマーカーでも非現実や不現実性の判断を表すマーカーでもない例を示す。

- 1) thuk thuk lɛɛŋ láaw siʔ lóɔynâm pǎy hǎa fɛɛn yuu fâak phûun³
 全て 夜 3SG 泳ぐ 行く PREP-まで 恋人 PREP-に 岸 DEM-あそこ
 「毎晩、彼は泳いで向こう岸にいる恋人に会いに行く」

例 1) は「彼は恋人に会いに行くために毎晩泳ぐ」という彼の行動を述べている場面の文である。文頭に「毎晩」とあり、彼にとって川を泳いで向こう岸の彼女に会いに行くのは毎日行っている決まった行為であることを話し手は知っている。換言すれば、この文は、過去から現時点まで続いている彼の習慣的な行為を述べている。従って/siʔ/は未来時制を表しているものでもなく、非現実を表すものでもない。また、彼の習慣的な行為という明確な根拠に基づいた叙述であるので、話し手の不現実性の判断を表しているものでもない。

- 2) khòy yâan mɛɛ siʔ pɛ̃n nɛ̃w ʔuuun khòy cung bɔɔ kâa nóɔn
 1SG 恐れる 母 COP 様式 他 1SG LINK NEG 勇ましい 寝る
 「私はお母さんの病気が悪くなることが怖くて寝られないんです」

例 2) は母親の病状が今よりもさらに悪くなることを想定し、子である話し手が母のことが心配でなかなか眠れないことを述べている場面の文である。一見、発話時点よりもあとに起こること、即ち未来のことを述べているように捉えることができる。あるいはまだ起こっていないこと、即ち/siʔ/が非現実を表しているようにも捉えることができる。しかしながらこの場面では/siʔ/がなくても/yâan/（恐れる・危惧する）によって、これから起こることを述べていると解釈できる。このことから/siʔ/が未来や非現実を表すための必須成分ではないと言える。さらには/siʔ/がなくても/yâan/（恐れる・危惧する）によって、話し手が事態の実現を想定している文であると解釈できる。このことから/siʔ/が話し手の不現実性の判断を表しているための必須成分でもないことがわかる。

以上、例 1) は彼は毎晩泳ぐ、例 2) は母が現在病気である、という客観的根拠にもとづく発話であり、例 1) と例 2) はいずれも/siʔ/が未来や未然を表すためのマーカーでも非現実や不現実性の判断を表すマーカーでもない、ということを示した。

1.6. /siʔ/と/cáʔ/について

検討に先立ち、/siʔ/と/cáʔ/の異同について簡単に述べておく。

一般に/siʔ/と/cáʔ/は同じ意味で、従来、両者の違いは前者が口語的で、後者が文語的な点にあると言われてきた⁴。しかし、ここ 10 年の間に口語でも/cáʔ/の使用頻度が高まっていることから単なる文語と口語の違いであるとは言えないであろう。また、確かに収集した/siʔ/文のほとんどが/cáʔ/に置き換えが可能であることから両者は非常に似ている意味だと思われるが、/siʔ/と/cáʔ/の置き換えが不可能な文も

³ ラオ語の表記は鈴木 (2006) に、グロス略号はライプツィヒのルール (The Leipzig glossing Rules) と鈴木(2019)に従う。

⁴ 1980 年代のラオスでは、/cáʔ/は書き言葉にも話し言葉にもほとんど使用されず、その後徐々に/cáʔ/が書き言葉に現れ、話し言葉においても/siʔ/と/cáʔ/を両用するようになった。さらには 2010 年代に入り、特に若年層の間では/siʔ/の使用が減り、/cáʔ/の使用が増えてきている。タイ語の影響かどうかは不明。

ある。従って両者は全く同一の意味を持つとは言えない。例えば、病気の母の看病について話している場面の例 3) は/cáʔ/が使えて/siʔ/が使えない例である。

- 3) a. *⁵suanlăay khòy siʔ tɔŋ tuun phôm káp mɛɛ
 b. suanlăay khòy cáʔ tɔŋ tuun phôm káp mɛɛ
 大部分 1SG AUX-義務 起きる 揃う PREP-と 母
 「私、大体はお母さんと一緒に起きなければなりません」

また、ラオ語の/siʔ/は地方、特に北部地方や高齢者の間では/cíʔ/と言う場合がある。

- 4) ʔăw tɛɛ phûakcâw cíʔ ʔét thoʔ
 取る PREP-だけ 2PL する PTCL-REQ
 「あんた達がやりたいようになりなさい」

/cáʔ/についてはタイ語と同様に「認識している」という意味の/cák/⁶に由来する語だと思われる (Dillar2001・Enfield 2007・高橋 2009)。/siʔ/と/cáʔ/が異なる意味であるという背景には、先の例 3) に加え、例 5) 例 6) に見るように、/cáʔ/の元の形/cák/と/siʔ/、あるいは/siʔ/の異形態である/cíʔ/と/cák/を並べる形が現在でも使用されている、ということがある。もし、全く同じ意味であるならばどちらかを使用しなくなるはずである。

- 5) bɔɔ cák siʔ waa néewdăy dīi
 NEG COMP Q-どう よい
 「どう言えばよいかわからない」

- 6) tɔɔ cák cíʔ wáan phăy, peŋ nâm peŋ náy kaʔ ɲâak
 2SG 頼る Q-誰 放つ 水 放つ 中 LINK 難しい
 「あんた、誰に頼むの、水を汲み上げてもらうなんて大変なんだから」

本稿では/siʔ/のみを検討対象とし、両者の異同に関する共時的、および通時的な検討は別稿で検討することにしたい。

2. /siʔ/文と使用場面

本章では、/siʔ/がある場合とない場合とで伝達内容がどのように異なるかを検討する。具体的には、先の 1.3. で示した資料の/siʔ/文について、①/siʔ/を削除すると、文として不適格文となる場面はどのような場面であるか、②/siʔ/があってもなくても適格文となる場面では、/siʔ/の有無により伝達内容にどのような差異があるか、ということについてコンサルタント調査を行い、その要因を検討する。

⁵ *は使用場面の観点から使用が不適格となる文のことある。

⁶ /cák/は反語の意味をもつ慣用表現でよく使われる。また、/cák/単独で「わからない・知らない」という意味で使うこともある。

2.1. /siʔ/必須の場面

本節で挙げる例文は, 使用場面において/siʔ/がないと文として不適格であるとコンサルタントが判断した文である. 使用場面の観点から言うと/siʔ/がないと文として使用が不適格となる場面, 即ち/siʔ/必須の場面である.

- 7) a. thàa dɛɛ, lǎan siʔ pǎy diawnii
 b.*thàa dɛɛ, lǎan pǎy diawnii
 待つ PTCL-REQ 甥/姪-1SG 行く すぐ
 「待って. 私, 今すぐ行く」

例 7) は話し手が外出を急かす伯父に身支度をしながら言う場面である. コンサルタントによれば, /pǎy/「行く」の前に/siʔ/があることによって, 自分が行くという気持ちが表れていると言う. /siʔ/は基準となる時点から見て, 話し手がその後に取り得る事柄の実現について, 身支度をしているという確定的な事実に基づいて明確に把握しているときに使われている.

- 8) a. nôɔŋ siʔ pǎy sǎy
 b.*nôɔŋ pǎy sǎy
 弟妹-2SG 行く Q-どこ
 「どこ行くの?」

例 8) は, 近所のお姉さんが乗り合いタクシーに乗り込んだ男の子に行き先を尋ねている場面である. 乗り合いタクシーに乗ったということは, 男の子がある明確な目的地に行くことに他ならず, 近所のお姉さんはその事実を把握している. コンサルタントによれば, /siʔ/があることによって, どこに行くか知りたいという気持ちが表れていると言う. /siʔ/は基準となる時点から見て, 話し手がその後に取り得る事柄の実現について, 男の子が乗ったという確定的な事実に基づいて明確に把握しているときに使われている.

例 7) 例 8) から今後の事態の実現を確定的な事実に基いて述べる, ということを表すときには/siʔ/が必要であるということになる.

- 9) a. thàa ʔanupâat hày mɛɛ múa, mɛɛ siʔ luk ɲaɲ dâɲ
 b.*thàa ʔanupâat hày mɛɛ múa, mɛɛ luk ɲaɲ dâɲ
 HYP 許可する CAUS-使役 母 帰る 母 起きる 歩く PBL
 「もし帰っていいと言ったらお母さんは起き上がって歩くよ」

例 9) は話し手の「(母は今病気で入院中だが一時帰宅が許されれば) 母は起き上がって歩くだろう」という希望的観測を述べている場面である. この場面では母が歩けるかどうかは全くわからないので, 基準となる時点から見てその後に取り得る「起き上がって歩ける」という事態に対する客観的な根拠や確定的な事実はない. コンサルタントによれば, /siʔ/があることによって, 話し手の歩いてほしい, という気持ちが表れていると言う. /siʔ/は今後の事態の実現は不確実であるが, 「歩く」という起こりうる事態を主観的な願望として述べているときに使われている.

- 10) a. khòy khǎo sǎnpáa waa siʔ kêe tǔa may
 b. *khòy khǎo sǎnpáa waa kêe tǔa may
 1SG REQ 約束する COMP 直す 体 新しい
 「私は自分を変えることを約束します」

例 10) は、話し手が「自分を変える」という事態実現の決意を述べている場面である。この場面では、自分が約束を破るなどしていつも家族をがっかりさせているという経験に基づくものの、自分が今後、確実に変わるという客観的な根拠や確定的な事実はない。コンサルタントによれば、/siʔ/があることによって、話し手が自分を変えるということに対して強い意志を持っている気持ちが表れていると言う。/siʔ/は今後の事態の実現は不確定であるが、「自分が変わる」という今後起こりうる事態を主観的な決意として述べているときに使われている。

以上、/siʔ/を削除してはいけないという判断をコンサルタントから得た文について、/siʔ/を削除すると情報として何かが足りなくなってしまうことを意味する、その足りなくなってしまうものが/siʔ/の意味である、という観点から使用場面を検討した。その結果、発話時点において何らかの理由に基づいて、話し手がその後の事態の実現を把握しているという認識を含意する場面では/siʔ/が必須で、/siʔ/は、話し手の今後の事態の実現に対する心的態度を表していることが導き出された。そこで次節では、どのような心的態度であるかに着目して場面を検討していくことにする。

2.2. /siʔ/があってもなくても適格文となる場面

本節で挙げる例文は、同じ使用場面において/siʔ/があってもなくてもよいとコンサルタントが判断した文である。使用場面の観点から言うと/siʔ/があってもなくても文として使用が適格となる場面、即ち/siʔ/の有無が任意の場面である。ただしコンサルタントによれば、/siʔ/の有無によって若干、話し手の心的態度が異なると言う。以下に/siʔ/の有無による話し手の心的態度についてみていく。

- 11) a. phoo cǎw sǎon nǎŋsǔu yuu phūn cáknòy koo siʔ káp máa lêew
 b. phoo cǎw sǎon nǎŋsǔu yuu phūn cáknòy koo káp máa lêew
 父 2SG 教える 本 PREP-で あそこ 少し LINK 帰る 来る PRF
 「お父さんはあその学校で教えていて、もう少ししたら帰ってくるよ」

例 11) は、話し手が父親の居場所を尋ねる子供に対して答えている場面である。話し手は子供の伯母であり、父親の職場からの所要時間や職場の終業時刻という客観的な根拠から子供の父親がいつ帰ってくるかを明確に把握している上で今後の事態の実現を述べている。この場面では、/siʔ/があれば事態の実現を確信的に話し手が捉えていることを示し、/siʔ/がなければその実現に至る根拠と結果を単に叙述している、という違いがある。

- 12) a. múuunī meen múu thámʔít thii láaw siʔ sǎpsǎŋ phua cóp sân
 b. múuunī meen múu thámʔít thii láaw sǎpsǎŋ phua cóp sân
 今日 COP 日 最初 REL 3SG 試験する CONJ-目的 終える 学年
 「今日は彼女が卒業試験を受ける初日だ」

例 12) は、話し手が今日は彼女にとってどのような日であるかを彼女の恋人に話している場面である。話し手は彼女の母であり、彼女が受験することや試験初日がいづであるかを客観的な根拠から明確に

把握している上で今後の事態の実現を述べている。文脈から/siʔ/がなくても今後の事態の実現の可能性は高いが、/siʔ/があれば事態の実現を確信的に話し手が捉えていることを示し、/siʔ/がなければその実現に至る事実を単に叙述している、という違いがある。コンサルタントによれば、/siʔ/がなければ実現したのか、していないのかが不明瞭で、たとえ前後の文脈から実現していないことだとわかったとしても、話し手の確信的な気持ちが含意されないということである。

- 13) a. tɛɛ phûak nôɔŋ tɔŋ khút khǔm say fun wáy kɔɔn, mán cuŋ siʔ jay khùn wáy
 b. tɛɛ phûak nôɔŋ tɔŋ khút khǔm say fun wáy kɔɔn, mán cuŋ jay khùn wáy
 CONG-しかし 弟妹達-2PL AUX-義務 掘る 穴 入れる 肥料 置く まず それ LINK 大きい 上がる 速い
 「だけどまず穴を掘って肥料を入れて置かなきゃね、そうすれば早く大きくなるわよ」

例 13) は、「肥料をやれば作物は育つ」という客観的な根拠から今後生徒が肥料をやれば、野菜は順調に育つだろうと教員である話し手が確信している場面である。/siʔ/があれば事態の実現を確信的に話し手が捉えていることを示し、/siʔ/がなければその実現に至る根拠と結果を単に叙述している、という違いがある。

例 11) から例 13) はいずれも話し手が何らかの客観的な根拠に基づいてある事態の実現に対して確信をもっているときに/siʔ/を使っている。即ち、/siʔ/は今後の事態の実現に対する話し手の確信を表している。

ところが例 14) と例 15) は客観的な根拠というよりは、話し手がある経験に基づいて事態の実現を確実なものとしたいと捉えているときに/siʔ/を使っている例である。

- 14) a. dǒn dǒn siʔ múi lóm yǎn phat phaen
 b. dǒn dǒn múi lóm yǎn phat phaen
 たまに ある 風 涼しい 吹く 過ぎる
 「たまに涼風が吹く」

例 14) は、涼風が吹いたことがあるという事実に基づいて、今は吹いていないが、過去において涼風が吹いたこともあれば、今後においても吹くことがあるだろう、という可能性を話し手が述べている場面の文である。発話時点で既に「涼風が吹く」ことは起こっており、その事象は既に話し手にとって経験済みで、過去から現在、そして今後も起こりうる事象であるということを述べているのである。換言すれば、既に経験したことから話し手は今後も同様に「涼風が吹く」という事態を捉えている場面である。この場合は/siʔ/があれば話し手が事態の実現の可能性が高いと判断していることが伝わり、/siʔ/がなければ事実を単に叙述しているという違いがある。

ここで先の例 1) を再掲する。なぜなら例 1) も経験に基づいて事態の実現を捉えている場面だからである。

- 1) thuk thuk léɛŋ láaw siʔ lóɔynâm pǎy hǎa féen yuu fâak phûun
 全て 夜 3SG 泳ぐ 行く PREP-まで 恋人 PREP-に 岸 あちら
 「毎晩、彼は泳いで向こう岸にいる恋人に会いに行く」

例 1) は、文頭に「毎晩」とあることから、彼にとって川を泳いで向こう岸の彼女に会いに行くのは毎日行っている決まった行為、即ち習慣である。彼の習慣的な行為を述べているということは、事態は

過去から現在にわたって、何回も繰り返されている事態であり、換言すれば既に彼が経験したことである。例 1) はその経験からこれから先も同様に「泳いで行く」という事態を確信して捉えている場面である。この場合も/siʔ/があれば話し手が事態の実現の可能性が高いと判断していることが伝わり、/siʔ/がなければ事実を単に叙述しているという違いがある。

例 14) と例 1) はいずれも話し手が何らかの経験や事実に基づいてある事態の実現の可能性が高いと想定しているときに/siʔ/を使っている。即ち、/siʔ/は今後の事態の実現に対する話し手の想定を表している。

- 15) a. láaw siʔ lǎw thǎa cǒn lǔuk sǎmlet kǎan súksǎa káp khúun máa
 b. láaw lǎw thǎa cǒn lǔuk sǎmlet kǎan súksǎa káp khúun máa
 3SG 待つ 待つ CONG-まで 子-2SG 成功する NMLZ 学習する 帰る 返る 来る
 「彼はあなたが卒業するまで待っているつもりよ」

例 15) は、彼の態度や周辺の状況から母である話し手は主観的に「彼があなた(=子)を待つ」と想像している。この場合、/siʔ/があれば事態の実現の確実性が高いと想定していることが伝わり、/siʔ/がなければ既に結果として実現したと解釈し得るという違いがある。コンサルタントによれば、/siʔ/がないと、実現したのか、実現していないのかが不明瞭になり、たとえ前後の文脈から実現していないことだとわかったとしても、話し手のそうあってほしい、という気持ちが含有されないとのことである。

- 16) a. thukmúunñi wéelǎa kêew ʔòok sadǎeŋ, khàaphacǎw siʔ naŋ yuu thǎw mǎo sǒm láaykǎan
 cǒn sǔt yaaŋ suuunsǒm jǐndǐi
 b. thukmúunñi wéelǎa kêew ʔòok sadǎeŋ, khàaphacǎw naŋ yuu thǎw mǎo sǒm láaykǎan
 毎日 ～時 ケオ 出る 演じる 1SG 座る PREP-に 辺り 近い 観る 演目
 cǒn sǔt yaaŋ suuunsǒm jǐndǐi
 PREP-まで 終わる AUX-ような ほめたたえる 喜ぶ

「いつもケオが舞台上で演じるときは、私は上演終了まで舞台の近くに座ってニコニコしながら観るんだ」

例 16) は、話し手は主観的に「自分が座ってケオの上演を応援しなければならない」と義務付けている。この場合、/siʔ/があれば「いつも近くに座る」という事態の実現の確実性が高いと想定していることが伝わり、/siʔ/がなければ既に「いつも近くに座っていた」という結果として実現したと解釈し得るという違いがある。コンサルタントによれば、/siʔ/がないと、実現したのかしていないのかが不明瞭になり、たとえ前後の文脈から実現していないことだとわかったとしても、話し手の実現させたい、という気持ちが含有されないとのことである。

例 15) と例 16) はいずれも話し手が何らかの主観的な根拠に基づいてある事態の実現の可能性が高いと想定しているときに/siʔ/を使っている。即ち、/siʔ/は今後の事態の実現に対する話し手の想定を表している。

以上、/siʔ/を削除してもよいという判断をコンサルタントから得た文について、/siʔ/の有無による伝達内容の相異を見てきた。その結果、まずこれらの文に共通して言えることは、/siʔ/が表すことは時制やアスペクトを問題にしているのではない、ということである。例文ではいずれも/siʔ/がなくても時制やアスペクトが場面から明らかで、/siʔ/が直接的に「未来」や「未然」などには関与していない。話し手が事態の実現が「いつ」であるかを捉えているのではなく、話し手が事態の実現を「どのように」捉

えているかということに焦点を置いているのである。このことは 2.1.で導き出された/siʔ/は話し手の事態に対する心的態度を表しているということと一致する。そして、2.2.で/siʔ/の有無による伝達内容を検討したことによってその心的態度とは「何らかの根拠や事実に基づいて、ある事態の実現を確信事態、あるいは実現性の高い想定事態として捉えている」という態度であることが明らかになった。

2.3. /siʔ/の有無からみえてくること

/siʔ/の有無による伝達内容の違いをまとめる。

/siʔ/があることによって話し手の事態に対する認識、あるいは判断（以下、認識/判断）が文中に含意される。この点において/siʔ/は話し手の事態に対する心的態度を表すマーカ⁷である。そして、/siʔ/を含む文に共通して見られたことは、「事態の成立自体こそ不確実であるが、そのようになり得る/なっ
てほしい」という話し手の心的態度が表れている、ということである。この「事態の成立自体こそ不確実である」は「話し手が話す時点で不確実な事態であると捉えている」としても矛盾はない。一方、/siʔ/を含まない文に共通して見られたことは、話し手が事態の成立をどのように捉えているかは不明である、ということである。このような/siʔ/の有無による伝達内容の違いから、/siʔ/は「不確実であることに対して実現すると確信、あるいは実現性が高いと想定している」という認識/判断を付加するものであるということが導き出される。この「確信、あるいは実現性が高い想定」という2つの心的態度は、場面における話し手の事態の捉え方によってどちらかになり得ると考えられる。そのことを以下の例17)で示す。

17) a. lot méé siʔ máa lêew

バス 来る PRF

「バスが来る」

b. lot méé máa lêew

バス 来る PRF

「バスが来た」

17) a の/siʔ/文は、母親がバス停でバスを待っているがなかなかバスが来なくてぐずり始めた子供をなだめるために言っている場面である。バスが来たという事態はなく、バスが来るかどうかわからなくてもよいし、遠くにバスが見えていてもよい。「バス停にいるので、必ずバスが来るという確信を含意する」あるいは「バスが遠くに見えているのでもうすぐバス停に来るという確信を含意する」も可能であるし、「バスが早く来てほしいという気持ちからバスが来るという想定を含意する」も可能である。このように確信、あるいは想定、どちらかの解釈も可能な場合があり、どちらであるかは場面に拠る。一方、17) b の/siʔ/がない文は、バスが見えたり、バスのエンジンの音が聞こえた上でバスが来るという確実な事実を伝える文であるという違いがある。

3. /siʔ/と共起できない場面

本章では、/siʔ/と共起できない文から/siʔ/の意味を考察する。使用場面の観点から言うとそれは/siʔ/があると使用が不適格となる場面、即ち/siʔ/が不要の場面である。

⁷モダリティマーカ、あるいはモーダルマーカに該当するかもしれないが、別稿にてモダリティやムードの観点からさらに詳細に検討することにする。

まず、真実、真理を伝える場面では/siʔ/文は使えない。例えば理科の教科書など、客観的に真実を叙述する文に/siʔ/を使うことはできない。例えば、

- 18) *tǎawén siʔ khùn càak tháaŋ thittǎawénʔòk
tǎawén khùn càak tháaŋ thittǎawénʔòk
太陽 上がる PREP-から 方面 東
「太陽は東から登る」

- 19) *sǎeŋ siʔ wáy kuwaa sǎaŋ
sǎeŋ wáy kuwaa sǎaŋ
光 速い ~より 音
「光は音よりも速い」

- 20) *míi kòet siʔ tōŋ míi tǎay
míi kòet tōŋ míi tǎay
ある 生まれる AUX-義務 ある 死ぬ
「生物は死ぬものだ」

真実を表す文は、時間の経緯に沿って変化することはない確定性を有する成立事象を述べる文である。このような性格の文には話し手の判断が介入する余地はない。/siʔ/が使えないということは、/siʔ/の持つ意味と確定を有する成立事象が相反するか、意味不明になるからに他ならない。

次に聞き手にある動作を命令、依頼する場面では/siʔ/文は使えない。例えば、

- 21) *siʔ ʔát pat̚u dɛɛ
ʔát pat̚u dɛɛ
閉める ドア PTCL-REQ
「ドアを閉めて」

- 22) *siʔ máa hap ʔǎw mɛɛ
máa hap ʔǎw mɛɛ
来る 受ける 取る PTCL-REQ
「取りにおいでよ」

- 23) *siʔ pǎy ǵiawnii dāy bǔɔ
pǎy ǵiawnii dāy bǔɔ
行く すぐ PSBL PTCL-Q
「今すぐ行ってくれますか」

命令文、依頼文は、確定性を有する成立事象を表しているものではない。話し手が常に相手へ働きかけという発話意図を有する文である。その叙述内容は非現実の事態である。そして話し手としては実現への確信を持って発話することが前提である。にもかかわらず/siʔ/が使えないということは、/siʔ/の持つ意味と相手への働きかけという発話意図が相反するか、意味不明になるからに他ならない。従って

/si?/は相手へ働きかける意味を含有するものではないと言える。

このことを裏付ける事例の一つとして、次の例 24) にみるように、主語である動作主が二人称、即ち聞き手のとき、聞き手の内面にある意思をもって動作の遂行が実行されるということを述べる/si?/文は実行されることが話し手にもわかる場面でないといふ不自然である。

- 24) ?⁸ câw si? kĭn dĭawnĭi
 2SG 食べる すぐ
 「あなたはすぐ食べる」

しかし、例 25) のように聞き手に動作の遂行を尋ねる諾否疑問文は問題なく/si?/文が使用できる。

- 25) câw si? kĭn dĭawnĭi bǎo
 2SG 食べる すぐ PTCL-Q
 「あなたはすぐ食べますか？」

例 24) は、目に見えるなど、客観的な根拠などがない限り、話し手が聞き手の意思を確定的に知り得ることは困難で、相手の意思について通常は断定的に述べることはできないからである。一方の諾否疑問文の例 25) は、相手の意思がわからず、話し手が不確定な事態と捉えている文であり、真偽を問う文である、ということとは矛盾がないからである。

次に/si?/を使うことができない文として、経験を表す/khǎay/や願望を表す/yàak/を使用した文を挙げることができる。例えば、

- 26) *si? khǎay khii lotthiip nám láaw
 khǎay khii lotthiip nám láaw
 経験する 乗る 自転車 PREP-と 3SG
 「彼女と自転車一緒に乗ったことがある」

- 27) *si? yàak dâi lot jiipun
 yàak dâi lot jiipun
 願望する 得る 車 日本
 「日本製の車がほしい」

例 26) の経験は過去に既に成立済みで、確定している事態である。一方の例 27) も願望は自分の中で確定していることとして捉えている事態である。いずれも/si?/を使って述べる事態の実現が不確定という捉え方とは矛盾するから共起できないということになる。

さらに/si?/を使うことができない文として、新聞やニュースなどの事実を伝える叙述文を挙げるができる。確実に起こってしまったこと、即ち事態の成立が不確定だという判断を入れる余地がないこと、あるいはそのような判断を入れる必要がないことには/si?/を使うことはできないのである。1.4.で挙げた台本の場面設定や状況説明部分であるト書きの文は全て/si?/を使用していない。それは話し手の判断を入れる必要のない文、入り得ない文だからである。

⁸ ?は場面によっては使えなくもないが、あまり使用しない、何となく不自然である、とコンサルタントが判断した文である。

本章で扱った/siʔ/が使えない文は、いずれも確定的した事態を叙述する文であることがわかる。換言すれば、/siʔ/は既に確定的な成立事態だと話し手が捉えていることには使えないということを示している。このことは/siʔ/は不確実な事態に対して話し手の何らかの認識判断を表すときに使う、ということをサポートするものである。

4. /siʔ/の意味

第2章、第3章の検討内容より/siʔ/の意味を考察する。

まず、第2章の/siʔ/を使わなければならない場面と/siʔ/があってもなくてもよい場面から、話し手が事態の実現に対して実現してほしい、あるいは実現するにちがいない、と認識しているときに/siʔ/を使うとまとめられる。そして第3章の/siʔ/が使えない場面から、事態の実現が確定的な成立事態や事態の実現性に関する認識判断を必要としないときには/siʔ/を使わないとまとめられる。第3章の結果は第2章の結果と矛盾をきたすことはなく、/siʔ/は事態が不確実であると判断し、その事態に対して想定、あるいは確信という捉え方をしているということを示していると言える。

話し手が発話する時点では事態の存在が不確かであると捉えていることを示す例として、過去のことでも/siʔ/文が使えることを下例28)で示したい。

- 28) a. nakhían hòŋ pǔo hà náy wéeláa nân suanláay siʔ ɲay kuwaa khòy mót
 b. nakhían hòŋ pǔo hà náy wéeláa nân suanláay ɲay kuwaa khòy mót
 生徒 部屋 小学 NUM-5 PREP-中 時間 DEM-あの 大部分 大きい ~より 1SG 全て
 「あの頃の5年生の生徒はほとんどみんな、僕よりも大きかった」

例28) aは話し手が自分の5年生の頃を振り返っている場面であるので明らかに過去のことであるが/siʔ/が使える。これは、5年生の生徒は全員、自分よりも大きかったかどうかははっきりしないという話し手の心的態度が表れている。過去のことであるが、話し手にとっては不確実な事態なのである。/siʔ/がないbは全員が自分よりも大きかったことが確定的な事実であるという意味になる。bは全員が自分よりも大きかったことが不確実なときには不適格な文である。

先の例8)の近所のお姉さんが男の子に行き先を尋ねるときに/siʔ pǎy sǎy/「どこ行くの?」と/siʔ/文を使うのも、お姉さんは男の子がどこかに行くという事態については客観的な理由に基づいてははっきりと把握しているものの、行き先は不明であるので、起こり得る全体の事態は不確実であると捉えているからである。この「どこ行くの?」という文はラオ語の挨拶表現としてもよく使う。出会いの挨拶として使用される「どこに行くの?」「〇〇に行く」というやりとりにおいても疑問文には/siʔ/が伴い、回答文にしばしば/siʔ/が伴わないのは、疑問文は話し手の不確実だという判断が入る余地があるので/siʔ/を伴うのが自然で、回答文は不確定な判断を述べるのではなく、回答者が自分の行動について「〇〇に行く」という確定した事態を述べる文なので/siʔ/を伴わないのである。

ここで注意したいのは、/siʔ/が不可欠な文はいずれも確実に実現する事態であると断定できない確信・想定と言った話し手の認識判断が含意されていた、という点である。/siʔ/が確定していることではなく、不確定なことに使用できること、不確定であるからこそ実現されるのではないか、という心的態度を介入することができると考えられるのである。このことから/siʔ/は不確実な事態の上に立脚する意味を有すると思われる。

不確実な事態の上に立脚する意味を有するという点に関して、/siʔ/と共起して使用され得る/?aat siʔ/ /khúuu siʔ/ /khón siʔ/ /khúan siʔ/との共起の可否から考えてみたい。これらは順に/?aat siʔ/「～かもしれない」、/khúuu siʔ/「多分～だろう」、/khón siʔ/「きっと～だろう」、/khúan siʔ/「～べき」という推量を

表す助動詞である。推量という以上、事態の実現が不確実な事態に使用できる語である。これらの違いは順に実現に対する話し手の確信の度合いが高くなるという違いがある。そしてそれに連動するように、/siʔ/との共起制限に若干の差異が見られる。例 29) の a から d に見るようにこれらのうち、a. /ʔaat siʔ/ 「～かもしれない」 b. /khúuu siʔ/ 「多分～だろう」は不確実な度合いが高く/siʔ/との共起は自然だが、c. /khón siʔ/ 「きっと～だろう」は確信度が高く、d. /khúan siʔ/ 「～べき」は強く相手に働きかける意味が含意され、/siʔ/との共起は前者は違和感があり、後者は不自然となる⁹。これは、それぞれ事態の実現に対する話し手の確信の度合いから考えると説明がつく。/siʔ/は少なくとも話し手が事態の実現を不確実としていることに対して使うので、話し手の確信度が比較的低い a. /ʔaat siʔ/や b. /khúuu siʔ/との共起形は何ら問題ないが、話し手の確信度が高い c. /khón siʔ/との共起は違和感がある。また、先の第3章の命令文で示したように/siʔ/は相手への働きかけという発話意図と共起できないので、相手に働きかける d. /khúan siʔ/との共起は不自然、あるいは不可となる。

29) a. tǝnnân ʔǎpuʔ ʔaat siʔ mɛɛn pɛ̀et pǐi

あのとき 年齢 AUX-推量 COP NUM-8 CLF-歳

「あの頃、年齢は8歳だったかもしれない」

b. tǝnnân ʔǎpuʔ khúuu siʔ mɛɛn pɛ̀et pǐi

あのとき 年齢 AUX-推量 COP NUM-8 CLF-歳

「あの頃、年齢は多分8歳だっただろう」

c. ʔtǝnnân ʔǎpuʔ khón siʔ mɛɛn pɛ̀et pǐi

あのとき 年齢 AUX-推量 COP NUM-8 CLF-歳

「あの頃、年齢はきっと8歳だっただろう」

d. ʔ*tǝnnân ʔǎpuʔ khúan siʔ mɛɛn pɛ̀et pǐi

あのとき 年齢 AUX-推量 COP NUM-8 CLF-歳

「あの頃、年齢は8歳であるべきだ」

例 29) の/mɛɛn/は「名詞句1 + /mɛɛn/ + 名詞句2」という名詞述語文において、名詞句1と名詞句2が等価値であるという話し手の判断を表すコピュラである。「～はすなわち～に等しい、～に値する」に相当し、/mɛɛn/の後述部分は明らかに確定している事態として話し手が捉えていることを示す。したがって例 30) に見るように、/mɛɛn/と/siʔ/もまた共起することができない。

30) *tǝnnân ʔǎpuʔ siʔ mɛɛn pɛ̀et pǐi

あのとき 年齢 COP NUM-8 CLF-歳

「あの頃、年齢は8歳だった」

一方、明らかに確定していない事態を表す仮定や比喩などでは/siʔ/をごく自然に使う。仮定を表す文では条件節にも帰結節にも/siʔ/が表れ得る。例 31) は条件節、例 32) は帰結節に/siʔ/が使われている例である。例 33) は比喩の例である。仮定や比喩は、確実とは言えない例えの事態であるので/siʔ/と共起

⁹ /siʔ/ではなく/cáʔ/ならばよい。このとからも/siʔ/と/cáʔ/は全く同一の意味であるとは言えない。

できるわけである。

- 31) *thũŋ siʔ mǐi ɲǎŋ kəət khũm kəw tǎam, khòy tɔŋ hían hǎy cóp*
 HYP ある Q-何 生まれる 上がる LINK ADV-ても 1SG AUX-義務 勉強する CAUS 終わる
 「たとえ何が起こっても必ず卒業してみせるわ」

- 32) *thàa khòy phòw láaw lêw siʔ thǎam dòk*
 HYP 1SG 会う 3SG PRF 尋ねる PTCL
 「もし彼女に会ったら私、聞くね」

- 33) *thòŋfǎa mǐuut khúm khúu fǒn siʔ tók, tɛ ɲám nǐ phát bəw meen ladu fǒn*
 空 暗い 陰る ようだ 雨 降る CONJ-しかし 時 DEM-この 反対に NEG COP 季節 雨
 「雨が降りそうなくらい空が曇っている、この時期、雨季じゃないのに」

例 29) から例 33) でも明らかなように、/siʔ/は不確実な事態の上に立脚する意味を有すると言える。次に/siʔ/が不確実な事態に対して確信、あるいは想定、という捉え方をしていることを示す例として例 34) 35) を示す。

- 34) a. *mɛɛ siʔ luk ɲaŋ dǎy nɛnón*
 母 起きる 歩く PBL ADV-必ず
 「お母さんは必ず起き上がって歩く」
 b. *khòy mǎncǎy waa mɛɛ siʔ luk ɲaŋ dǎy*
 1SG 確信する COMP 母 起きる 歩く PBL
 「私、お母さんは必ず起き上がって歩くって確信している」

まず、例 34) は不確実な事態に対して確信という心的態度を表す例である。/nɛnón/「必ず」や /mǎncǎy waa/「～と確信している」という表現と/siʔ/の共起が可能であるということは、/siʔ/は不確実の事態であると把握した上で起こりうる事態だと話し手が確信しているということを支持するからである。

- 35) *khòy bəw mǎncǎy tɛ khâat waa mɛɛ siʔ luk ɲaŋ dǎy*
 1SG NEG 確信する CONG 想定する COMP 母 起きる 歩く PBL
 「私、確信はしていないけれど、お母さんは起き上がって歩くって想像している」

例 35) は不確実な事態に対して想定という心的態度を表す例である。/khòy bəw mǎncǎy tɛ khâat waa/「私は～ということを確信はないが、想定している」という表現と/siʔ/の共起が可能であることは、/siʔ/は不確実の事態と把握した上で起こりうる事態だと話し手が想定しているということを支持するからである。

これら確信、想定と言った認識/判断は、まだ起こったかどうか不確実である事態に対する話し手の実現成立の可能性があるという認識/判断である。それは蓋然的認識であると換言できる。

以上のことから/siʔ/は、事態の実現・非実現の判断そのものではなく、話し手が不確実な事態に対して実現の可能性があるという認識/判断を示すものであるとまとめられる。/siʔ/の後続部分は話し手の蓋然的認識であり、それは即ち推測内容である。従って/siʔ/は推測の意味を有すると言える。

5. /siʔ/文と時の表現

1.5.の先行研究で述べたように, /siʔ/は従来, 未然のアスペクトマーカ―、非現実を表すモーダルアスペクトマーカ―などと記述されており, いずれも「時」に関連した意味に解釈されている. そこで最後に/siʔ/と時の表現との関連について考えてみたい.

ラオ語は文法範疇としての時制を持たない言語である. ラオ語における「時に関する表現」には様々な方法がある. 時を設定する語彙や時に対する話し手の心的態度を示す語彙を文の適切な位置に置くことによっていつのことであるかを明示することもあれば, 文脈, あるいは人間関係等を含む場面全体, 言語外事実からいつのことであるかを判断することもある. 推量の意味を有する/siʔ/は事態の成立が不確実だと認識/判断した内容を述べる際に使用する. その内容は不確実であるがゆえにこれから起こることが殆どのはずである. これから起こることというのは現実はまだ起こっていないこと, 即ち非現実を表すことになり得る. /siʔ/が不確実な事態に使用されるということと非現実という認識との間には矛盾を生じさせる因子はない. そのため事態が非現実であると話し手が認めている時にも/siʔ/が使われるのである. しかしながら話し手がこの認識/判断をする時には事態はまだ時間軸に存在していない. そういう意味で/siʔ/はアスペクトマーカ―ではないと思われる, /siʔ/はあくまで事態をどのように捉えているか, という話し手の心的態度を示すものである. このことはまた時の観点からみれば事態をいつのことに捉えているか, ということにつながる場合がある. したがって/siʔ/は時の解釈に関与し得る語であるということができる.

6. 結論

/siʔ/は話し手の心的態度に依存する語である. 文中における/siʔ/は, 話し手が不確実な事態の実現に対する認識/判断を示している. それは実現に対する蓋然的認識であると換言できる. /siʔ/の後続部分は話し手の蓋然的認識, 即ち推測内容である. 従って/siʔ/は推測の意味を有すると言える.

本稿は主にコンサルタントの内省による判断に拠って意味を検討したので, 今後はアスペクト辞など, 他の機能語との共起制限を検討し, /siʔ/がなぜ時の表現と関連付けられるのかをより明らかにしたい. また, 話し手が事態をどのように捉えているか, という心的態度から/siʔ/の意味を検討することができるので, いわゆるモダリティの観点から/siʔ/について詳細に検討する必要がある.

〈使用グロス一覧〉

1	一人称	2	二人称	3	三人称
ACHV	達成	ADV	副詞	AUX	助動詞
CAUS	使役	CLF	類別詞	COMP	補文マーカー
CONJ	接続詞	COP	コピュラ	DEM	指示詞
EXP	経験	HYP	仮定	LINK	繫辞
NEG	否定	NMLZ	名詞化	NUM	数量詞
PREP	前置詞	PRF	完了	PL	複数
PSBL	可能	PTCL	句末助詞	PTCL-Q	疑問助詞
Q	疑問詞	REL	関係詞	REQ	依頼/命令
SG	単数				

参考文献

- Boonyapatipark, Tasanalai. 1983. A Study of Aspect in Thai. Doctoral Dissertation, University of London
- Diller, Anthony V. N. 2001. Grammaticalization and Tai syntactic change. in Tingsabadh, M.R. Kalaya and Arthur S. Abramson (eds.) *Essays in Tai Linguistics*, 139-175. Chulalongkorn University.
- Enfield, N.J. 2007. *A grammar of Lao*. Mouton de Gruyter
- Seesouvan, Pingkham & Others (eds.). 2000. *Vaynyakoan laaw pacuban, phaakthii 2; vaciiviphaak*. Research Institute of Educational Sciences, Ministry of Education.
- Wright, Pamela Sue. 1994. *A Lao Grammar for Language Learners*. (Special Issue) *Journal of Language and Linguistics*, Dept. of Linguistics, Faculty of Liberal Arts, Thammasat University
- 尾上圭介. 1999. 「文の構造と“主観的”意味—日本語の文の主観性をめぐって その2」 『月刊日本語』 28-1. 95-105.
- 金子わか子. 2010. 『現代ラオ語の/cá?/si?/について』 東京外国語大学大学院修士論文.
- 鈴木玲子. 2006. 「ラオ語の名詞句」 東南アジア諸言語研究会(編) 『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』, 119-153. 慶應義塾大学言語文化研究所.
- . 2019. 「ラオ語の情報標示の諸要素」 『語学研究所論集』 24. 393-400. (言語データ)
- 高橋清子. 2009. 「タイ語の非現実モダリティマーカー」 『神田外語大学紀要』 19. 189-210. 神田外語大学.
- 仁田義雄・益岡隆志. 1995. 「現代日本語分のモダリティの体系と構造」 仁田義雄・益岡隆志(編) 『日本語のモダリティ』 くろしお出版.
- 益岡隆志. 1995. 「認識のムードとその周辺」 仁田義雄・益岡隆志(編) 『日本語のモダリティ』 くろしお出版.
- 三上直光. 1996. 「タイ語の/cà?/に関する覚書」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 28. 197-212. 慶應義塾大学言語文化研究所.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃. 2002. 『モダリティ』 くろしお出版.
- ラッタナセリーウォン・センティアン. 2014. 『日本語とタイ語のアスペクト形式に関する研究』 大阪大学博士号取得論文.

執筆者連絡先: reikos@tufs.ac.jp

原稿受理: 2024年12月15日